自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0170501993		
法人名	有限会社 ライフアート		
事業所名	グループホーム福寿荘Ⅱ		
所在地	札幌市白石区北郷4条12丁目3-35		
自己評価作成日	令和3年10月20日	評価結果市町村受理日	令和3年12月21日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度の公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先URL https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/017/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&JievsvoCd=0170501993-00&ServiceCd=320&Type=search

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	合同会社 mocal		
所在地	札幌市中央区北5条西23丁目1-10-501		
訪問調査日	令和3年11月4日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

重度認知症専門ユニットとして、認知症緩和ケアの理念のもと終末期ケアに取り組んでいる。終末期であっても、その人の持つ力を十分に使い、自分で歩くこと・トイレで排泄すること・最期まで口から食べることを大切に、その人が『生きる』支援を行っている。特に最期まで口から食べる支援については、摂食嚥下障害があっても、食べやすくおいしい調理の工夫とともに、授乳用クッションを使った姿勢保持によって体幹保持機能が失われても椅子に座り適切な食事姿勢がとれるようにチームで取り組んでいる。また、食事の為に離床し、再度臥床するまで平均7回程度介助による移乗動作をすることによって重度の方の生活リハビリにもなっている。医療連携をとり、必要に応じて専門医への受診・往診ができる体制が整っていることで、最期まで安心して暮らせる場となっている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

閑静な住宅街に位置し建物の外観や内部は一般家屋の佇まいで温かな雰囲気があります。開設時より認知症ケアの真髄を追求し続け、実践と研究の元に知識や技術を高めて福祉の充実に貢献しています。同法人他のグループホームからの移行支援も実施しており、1階大地ユニットは重度化終末期の専門ユニットとして本人が最期まで生きられる為の大変良質なケアサービスを提供しています。これまで沢山の終末期支援に尽力しており、本人は元より家族の心情にも寄り添った支援に対して、家族から沢山の感謝の意が伝えられています。食の支援では、バリエーション豊かな献立で利用者の状態に即した内容で専門員が調理し提供しています。法人会長の「介護のコツの本」も参考に見た目や食べやすさ等が工夫されています。入居時に物取られ妄想があった方では、職員と一緒にその物を探し安心できる言葉がけと共に他の利用者との関係にも配慮をし続けた結果生活に落ち着きを取り戻した事例をはじめ、職員の介護力やケアマネジメントの高さを裏付ける事例が多数あります。また、職員の働き方改革にも取り組み職員も主体的に運営に参加しています。法人理念とケア理念が事業全体のものとなり、心のこもった一つひとつの温かい対応が関係する方々の心をも紡ぎ合う様子が感じ取れます。

V サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取組を自己点検した上で、成果について自己評価します

項目	取組の成果		項目	取組の成果	
	↓該当するものに○印			↓該当するものに○印	
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向をつかんでいる (参考項目:23、24、25)	○	1 ほぼ全ての利用者の 2 利用者の2/3くらい 3 利用者の1/3くらい 4 ほとんどつかんでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9、10、19)	○	1 ほぼ全ての家族と 2 家族の2/3くらいと 3 家族の1/3くらいと 4 ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18、38)	○	1 毎日ある 2 数日に1回程度ある 3 たまにある 4 ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2、20)	○	1 ほぼ毎日のように 2 数日に1回程度 3 たまに 4 ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1 ほぼ全ての利用者が 2 利用者の2/3くらいが 3 利用者の1/3くらいが 4 ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1 大いに増えている 2 少しずつ増えている 3 あまり増えていない 4 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36、37)	○	1 ほぼ全ての利用者が 2 利用者の2/3くらいが 3 利用者の1/3くらいが 4 ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働いている (参考項目:11、12)	○	1 ほぼ全ての職員が 2 職員の2/3くらいが 3 職員の1/3くらいが 4 ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1 ほぼ全ての利用者が 2 利用者の2/3くらいが 3 利用者の1/3くらいが 4 ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1 ほぼ全ての利用者が 2 利用者の2/3くらいが 3 利用者の1/3くらいが 4 ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30、31)	○	1 ほぼ全ての利用者が 2 利用者の2/3くらいが 3 利用者の1/3くらいが 4 ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1 ほぼ全ての家族等が 2 家族等の2/3くらいが 3 家族等の1/3くらいが 4 ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1 ほぼ全ての利用者が 2 利用者の2/3くらいが 3 利用者の1/3くらいが 4 ほとんどいない			

自己評価及び外部評価結果

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	1	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念を作り、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	一人を大切に・支え合う心・安心して暮らせる社会づくりを法人理念とし、一人一人意思を尊重し、その人らしく最期まで生活できることを目標に日々取り組んでいる。	法人理念・ケア理念を事業所内の要所に掲示しています。パンフレットと重要事項説明書にも明示し、利用契約時に家族へ説明しています。ケア理念の4つの条文とケアの実際の繋がりについて確認しており、事業所全体のものとなるように努めています。	
2	2	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会へ加入し、町内会行事にも可能な限り参加していた(新型コロナウイルス感染拡大で現在は参加せず)近所の方々へ積極的に挨拶するなど、地域の一員としての意識をもち、気軽に交流ができるよう努めている。	コロナ禍により中止や制限がある状況ですが、例年、町内会の消防訓練や夏祭りには家族と一緒に参加をしたり、事業所真向かいに立地する同法人認知症カフェに訪れた方々や地域住民の相談事に応じています。また必要物品の寄付や庭木の手入れなどで住民の協力を得ています。	地域協力者の高齢化に鑑み、新たな協力者も募りつつ関係性を築きながら今後も地域福祉に尽力する意向ですのでその取り組みに期待します。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域運営推進会議で町内会の方にホームでの取り組みやケアの方法などの情報を提供している。		
4	3	○運営推進会議を活かした取組 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍であるため、書面で取り組みなどを報告している。寄せられた意見は質の向上に役立てている。	事業所の近況報告を家族等のメンバーへ通知し、取り組み等の意見やアドバイスの返信を得ています。これらは議事録にして再度発送しています。関係者間が相互に意見等を発信できる仕組みを整えた中で書面会議を行っています。	
5	4	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	グループホーム管理者連絡会や在宅ケア連絡会に参加し、連携を図れるようにしている。また、認知症介護指導者としての活動を通して札幌市と連携を取り合っている。	管理者は認知症介護指導者として市の依頼を受けて講師等を務めるなど協働関係を築いています。全国的ネットワークにより福祉事業の情報を得てサービスの向上に生かしています。	
6	5	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	ベットからの起き上がりや立ち上がりで転倒・転落のリスクがある場合には家族の了解のもとセンサーで対応し、身体拘束は行っていない。また、薬剤による活動の制限が生じないよう主治医と連携を取っている。	身体拘束適正化に関する指針を定めて3か月に1度の適正化委員会を開催しています。これらに係る不適切ケアの研修は10月から毎月の実施となっています。玄関は夜間帯のみ施錠しています。状態変化に応じて家族等と十分話し合いを行っています。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	社外研修に参加したり、通達を確認しながら職員への周知を行っている。明確な虐待とは言えないが不適切なケアをしていないかも含め、社内研修を行っている。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度の理解ができるよう研修に参加したりし、入居者の状況に適切に対応できるよう知識を深めている。必要な場合には成年後見制度が活用できるよう相談・支援にあたっている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	日常的にも疑問や不安があれば、その理由や解消に努めている。入院や退去等その都度話し合いを行い、理解・納得が図れるようにしている。		
10	6	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	定期的な家族会を実施し、そこでの意見を職員に周知し運営推進会議で外部の方々にもお知らせしていたがコロナ禍であるため家族会の開催はできずにいるが、管理者が利用者や家族からの意見をきけるようは心掛けている。	運営推進会議は元より、現在は自粛ですが家族会を開催し意見や要望を引き出す努力や機会を作っています。インターネットを活用し日常のサービス状況を具体的に発信して面会制限中での家族の思いに応えています。利用者からの要望等はその都度受け止めサポートしています。	
11	7	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	今年度より働き方改革委員会を発足し、委員が中心となって様々な話し合いを進めている。その他にも、日常的な申し送りやユニット会議でも職員の意見や意向を聞くようにしている。	年2回管理者が職員との個別面談を実施しており処遇改善に係るキャリアパスに取り組んでいます。楽しく働くための働き方改革委員会を立ち上げ、毎月1回話し合われています。職員自ら環境委員会を作る提案もなされるなど、職員とともに作る運営体制が整っています。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	定期的なキャリアパス、面談、スタッフの自己改善計画書などを活用し取り組んでいる。また、介護福祉士資格取得のために実務者研修を会社として行い、資格取得を目指す職員同士が支え合いながら研修に取り組んでいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍で社内研修が出来ていなかったが、10月より再開している。また、社外の研修はオンラインなどで受講したりしながら知識の習得を行っている。研修報告や面談でケアの実際や力量を把握し、OJTを進めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組をしている	全国組織のネットワークを築いており、相互間の研修を実施し、人材育成やケアの質の向上を図っている。		
II 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居される生活の場をできるだけ見ていただくようにホームに出向いていただくことも行っている。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご本人の様子についてこまめに連絡を入れながら、ご家族と十分に話し合えるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談を受けただけで、今何の支援を必要としているのかを話し合い、緊急性の有無を確認し、他サービス利用も含めた対応をしている。		
18		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者から学びを得ることは多々あり、職員はその入居者に感謝・尊敬の気持ちを持ちながら過ごしている。		
19		○本人を共に支え合う家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族や職員の話を変えながら、入居者自身を中心とした関係づくりに努めている。入居者自身にご家族の話をしたり、その時の入居者の様子をご家族に伝えている。コロナ前は食事や入浴介助に家族が携われるようにしていた。		
20	8	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人が直接思いを伝えられないことが多く、家族を通じて働きかけてもらうなど一人一人の状態にあった方法を家族と相談しながら進めている。アルバムや映像を用意してもらい本人の調子が良い時に見てもらおうなどの働きかけをしている。	面会制限以前は家族以外に、昔の職場の仲間やサ高住で一緒だった友人が訪れることもありました。家族の協力が厚く、懐かしい景色をDVDに収めたものの提供や動画や花の写真等が贈られており、利用者に伝える環境を整え関係性等への配慮を行っています。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	本人の状態や周囲の環境に応じて、他者と関わったり職員が個別に対応するなどしながら孤立しないように努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組 サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	今までの関係はこれからも継続することを伝え、相談に応じている。時に近くに来たため立ち寄ったとホームに訪ねて来てくれることがある。		

Ⅲ その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント

23	9	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	家族からも情報を収集し、本人の立場に立ったケアプランを立案、実践、評価を通して、本人の思いや意向を捉える努力をしている。	利用者への理解を深める事を常として、日常の関わりから気持ちを汲み取り本人本位を検討しています。生まれ育った若かりし頃の状況などを兄弟姉妹から新しい情報として得ることもあり、アセスメントに追記して共有や把握がなされています。	
----	---	--	--	---	--

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	センター方式を利用し、これまでの生活を家族からも伺えるようにしている。また、家族とのやり取りの中で昔好きだったことや好物等さらに情報を得られるような関わりをしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	センター方式の利用や日常的な申し送り、記録から一人一人の日々の様子を職員全員で総合的に把握するように努めている。		
26	10	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	チーム・家族・本人(難しい場合は意向)を含めて共同で作成し、期間に応じて見直している。また、本人に変化が生じた時には、その都度対応の検討、ケアプランの修正を行っている。	アセスメントはセンター方式を活用しEシートでケアのアイデアと工夫を導いています。具体的で詳細な個人記録の他、カンファレンスノートにて利用者へのアプローチや支援の見直し、アイデアについて都度記載してモニタリングに生かしています。関係者がチームとなり根拠を明確にした思索のある計画を作成しています。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護計画に基づいた実践を記録している。また、日々の申し送りでの情報の共有も行いながら、その結果をプランにつなげている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスにとらわれない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	デイサービスとグループホーム間で連携をとりながら、その時々生まれるニーズに対応するようにしている。また、医療に関して定期的な往診だけでなく、状態に変化が生じた時には速やかに往診や専門医への受診ができるようにしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	現在はコロナ禍であるため、地域資源の活用が今までのようにはできないが、訪問美容は感染対策が徹底している業者に変えて、利用時期を考えたいうえで調整することで、コロナ禍であっても入居者の満足感に繋げている。		
30	11	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月2回の定期往診があり、入居者の状態変化があれば、連絡を取り往診して頂いている。また、希望や必要に応じて専門医への受診ができるように支援している。	在宅療養支援診療所と医療連携を結び往診体制を整え、歯科も必要時に往診が得られる体制です。看護師を職員配置しより適切な医療が受けられるよう連携しています。毎月、主治医から在宅療養管理提供書を得て健康管理支援に反映させています。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	事業所看護師に、日常の健康管理や状態変化について相談や助言をしてもらっている。また、日常的に協力医院との連携を行っている。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている、又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	早期退院を第一に相談し、必要な情報を提供及び共有に努めている。また、入院中に対応に困ったときには連携が取れるような関係づくりに努めることで、入院中も安心して過ごせるように支援している。		
33	12	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者とともにチームで支援に取り組んでいる	入居時に終末期に関しての在り方について説明と同意を取っている。さらに、状態に応じ早い段階から家族とかかりつけ医、ホーム代表者などで随時話し合いの場を設け、その都度方針を確認し合っている。	開設時より重度化・終末期支援に取り組み、今年度は6名の看取りに尽力しています。大地ユニットは重度化・終末期専門ユニットとして同法人福寿草ⅠとⅢより受け入れも行き手厚い介護と看護がなされています。状況変化に応じて関係者間で話し合いを繰り返しています。職員は人生を全うする利用者の姿から多くを学んでいます。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	対応マニュアルに沿って実践している。急変や事故が起こった後にもスタッフと共に振り返りを行いながら、ケアの具体的方法や視点を確認している。		
35	13	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回防災訓練を実施している。コロナ禍であるため、以前の様に町内会の方達に訓練に参加してもらう事はできないが協力体制は築けている。新人職員には指導夜勤の際に災害時の対応について改めて伝える機会を作っている。	昨年11月と今年7月に夜間想定火災避難訓練を実施しています。自然災害に関しては机上やモデル訓練にて実情に合った避難のあり方を検討しています。運営者である管理者は、災害への心構えの重要性を指摘しており、折につけ話題にし職員への意識化に取り組んでいます。	

IV その人らしい暮らしを続けるための日々の支援

36	14	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	重度の方達が生活しているため、多くの介助が必要となるが、その際トイレや入浴などは他者の目に触れないように細心の注意を払うと共に、上手く返答ができないとしても本人の了解を得てから介助をするなど、敬意をもって接するよう努めている。	介助において尊厳を重視する姿勢や心構えを大切にしています。また、法人理念やケア理念を念頭に介護の真髄を日々追求する姿も窺えます。毎月の不適切ケア研修は振り返りができる大切な学びの機会となっています。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	すべてにおいて自己決定は難しいが、表情やしぐさから気持ちを読み取るようにしている。可能な限り本人の意思を確認できる様、おやつや洋服など選びやすもので希望を表せるように働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望に沿って支援している	一人一人の睡眠や覚醒のリズムを把握し、そのリズムを基本に生活の組み立てを行っている。また、本人のペースを尊重しつつ体力や状態に合わせた生活の組み立ても考えて支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	重度になりベッドで休む時間が一日の大半となっても寝間着ではなく、一人一人がその人らしい装いができるよう家族にも協力してもらい支援している。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	15	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	その人の好みをメニューに取り入れることで自分で箸やスプーンを使って食べられるように工夫している。摂食嚥下障害があっても美味しく食べられるよう調理や盛り付けの工夫をしている。	献立は利用者の状態に応じて多種多彩に工夫されており、食事専門員が丁寧に調理しています。日本古来の行事食や季節感ある食事もある楽しみが持てるように提供しています。美味しいものを研究し利用者の食べる力を引き出しています。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事・水分摂取量を把握し、チームで情報共有しながら、必要な時に必要な物をしっかり取れるように対応している。状況に合わせた水分摂取ができるようゼリーは3種類を用意し、その人の状態像に合わせて支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	その人に力に応じた口腔ケアを実施している。嚥下機能障害がある方にはブラッシングと口腔ケアスポンジでのケアを食事の前後で行うことにより、口腔内の清潔保持だけでなく、誤嚥性肺炎の予防にも繋がっている。		
43	16	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	どんなに重度になってもトイレで排泄ができるよう排泄リズムを把握し、シグナルの読み取りをチームで取り組んでいる。排便についても失禁とならないように下剤の調整を行いすっきりと排便ができるように支援している。	職員は利用者一人ひとりの排泄に関するシグナルやパターンを把握しており、重度化等の方も全介助でトイレでの排泄を支援しています。排便は薬剤に頼り過ぎずに中食等を工夫をしたり、要部をマッサージするなどして本人の負担軽減に努め対応しています。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	過剰に薬剤を使用せず、ヨーグルトやオリゴ糖などを用いたり、食物繊維（サンファイバー）や水分摂取など生活の中で便秘予防となる取り組みを行っている。		
45	17	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々に沿った支援をしている	心身状態を把握し、配慮しながら取り組んでいる。重度化により体力に限られてくる場合には、できるだけ午前中入浴できるように配慮している。また、体力の消耗度合いでシャワー浴で対応するようにもしている。	入浴にかかる一連の流れにおいて本人の心地良さに配慮した支援に努めています。心身の状態等に応じて終末期においても職員2人介助で湯船に浸かれる態勢です。入浴が難しい時期にあっては代替のケアを工夫しています。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	居室で本人の好きな音楽をかけ休息を取ったり、リビングで一緒に過ごしながら休息をとったり、その人が安心して休めることを第一に状況に合わせて対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬の重要性をしっかりと理解し、効能と副作用についてチームで確認し、その変化の有無を把握できるようにしている。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	外気に触れたり、外を眺めたりする時間や、好みの音楽を聴くなど暮らしの中で自然にできると支援を行っている。また、本人の状態や覚醒状況に応じてリビングで過ごしてもらっている。		
49	18	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望に沿って、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気の良い日や入居者の状況に合わせて外の空気を吸ったり風に当たるなどの支援をしている。縁側やテラスを活用し外気やお日様に当たる工夫をしている。	訪問調査時点では家族との面会や外出は制限中です。左記の自己評価にある取り組み以外に、本人の要望に応じて太陽ユニットの利用者が大地ユニットに短時間訪問し、また違う雰囲気の中でゆるやかなひと時を過ごしています。来年の春に家族と一緒に美しい桜を見ることができるよう健やかな日常に配慮しています。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	実際にお金を使うことはないが、本人の安心につながる支援として、外出時に持ち歩いていた鞆に少額が入った財布を持ってもらうなどしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	重度化により自分で電話や手紙のやり取りをすることは困難であるが、ラインを活用して写真や動画のやり取りを行っている。		
52	19	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節や行事にあった花やタペストリーで雰囲気づくりに努めている。絵画や適切な明かりで安心感がもてるよう工夫をしている。また、共用空間を温かみを感じる空間になるよう配慮している	共用空間は木調で全体的に清潔感があります。趣のある家具類や置物も愛らしさがあり、絵画や植物も飾られています。季節や行事毎にタペストリーを替えて雰囲気を感じてもらえるようにしています。夏場の暑さ対策はクーラーや扇風機で空調を管理し、暑さが引いた後の体調変化も鑑みながら温度調節がなされています。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	その人に状態に合わせた居場所作りをしている。また、ゆったり座れるリクライニングを用意し、重度になってもゆったりと過ごせるようにしている。		
54	20	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人の馴染みの物を持って来てもらい、居室内で心地よく過ごせるように配慮している。また、臥床時にも本人の安心につながるものや馴染みのものが見えるように工夫している。	家族の協力も得ながら利用者が心安まる物品を整え、安心して過ごせる環境を設えています。懐かしい思い出のアルバムはいつでも見れるようにしたり、家族から寄せられた写真は拡大してベット側に掲示するなどしています。個々の状態に応じた動線確保にも配慮し安全面にも留意しています。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	テーブルや椅子の形や配置を工夫し、安全で且つ自分の力を発揮して生活できるようにしている。また、状態や状況に合わせて配置を変えたりもしている。		